

【最優秀賞】

【蛇口の向こう側にある「半日」】

名古屋市立今池中学校 二年 森島 早咲

日本では、蛇口をひねれば当たり前のように水が出ます。朝起きて顔を洗い、歯をみがき、のどが渴けばコップに水を注ぐ。暑い日には冷たい水を飲み、寒い日には温かいお風呂に入る。料理、洗濯、掃除、トイレ。私たちは一日の中で数えきれないほど水を使っています。それなのに、水が出ることを特別だと思ふ機会ほとんどありませんでした。水は空気のように、あつて当然の存在だったのです。しかし世界には、安全な水を手に入れない人が二十億人もいると言われています。例えばアフリカのエチオピアや南スーダンなどでは、家の近くに水道がありません。人々は夜明け前に家を出て、遠く離れた井戸や川まで歩きます。乾いた大地を何キロも歩き、照り付ける太陽の下で長い列に並び、やっとの思いで水をくみます。しかしそれで終わりではなく、重い水を持って再び長い道のりを戻らなければなりません。その往復だけで半日が過ぎてしまうこともあるのです。その役目を担っているのは、多くの場合子供たちです。まだ体の小さな子供が、大人でも重たいと感じる水がめを頭や背中のにせて運びます。水は一杯では足りません。家族が一日生きるためには何度も往復しなければならぬこともあります。私はその様子を伝える映像を見たことがあります。少女は無言で前を向き、汗を流しながら一步一步進んでいました。足元はでこぼこで、つまずけば水はこぼれてしまいます。水がこぼれば、また最初からやり直します。その姿を見たとき、私は言葉を失いました。私が教室で授業を受け、友達と笑い、放課後に部活動をしている時間。その何気ない半日を、彼らは水を運ぶために使っています。もし私がその立場だったらどうだろうと想像してみました。重い水を運び終えたころには疲れきってしまい、勉強する気力は残っていないかもしれないかもしれません。本を読む時間も、夢を語る時間も、水くみによって奪われてしまいます。水がないということは、喉が渇くという問題だけではありません。教育の機会を失い、将来の可能性まで狭めてしまうのです。さらに、安全でない水は病気を引き起こします。きれいな水がなければ十分に洗うこともできず、感染症が広がります。体調を崩しても医療が十分でない地域もあります。水は命を守るものであり、人の人生を支える土台なのだとは強く感じました。一方で、日本では水道の水をそのまま飲めることが当たり前です。浄水場で水をきれいにする技術や、地下に張りめぐらされた水道管など、多くの人の努力によって支えられています。それにもかかわらず、私はこれまで水を出しっぱなしにしてしまったことがあります。その行動がどれほど恵まれた環境の上に成り立っていたのかを思うと、とても恥ずかしくなりました。蛇口をひねる数秒と、遠い国の子供たちの半日。同じ一杯の水でも、そこに込められた時間の重みはまったく違います。この事実を知った今、私は水との向き合い方を変えたいと思いました。歯磨きの時はこまめに水を止めること、シャワーの時間を短くすること、食べ残しを減らすこと。さらに、水問題について学び続け、自分にできる支援を考えていきたいです。蛇口の向こう側には、誰かの汗と努力、そして半日という大切な時間があります。その時間を想像しながら、私は一滴の水

にも感謝して生活していきたいです。そしていつか、世界中の子供たちが水くみではなく、自分の夢のために時間を
使える社会になることを心から願っています。